鎮西八郎

楠山正雄

一

八幡太郎義家から三代めの源氏の大将を六条判官為義といいました。為義はたいそうな子福者で、男の子供だけでも十四五人もありました。そのうちで一番上のにいさんの義朝は、頼朝や義経のおとうさんに当たる人で、なかなか強い大将でしたけれど、それよりももっと強い、それこそ先祖の八幡太郎に負けないほどの強い大将というのは、八男の鎮西八郎為朝でした。

なぜ為朝を鎮西八郎というかといいますと、それは

こういうわけです。いったいこの為朝（ためとも）は子供（こども）のうちからほかの兄弟（きょうだい）たちとは一人（ひとり）ちがって、体（からだ）もずっと大きいし、力（ちから）が強（つよ）くって、勇気（ゆうき）があって、世（よ）の中に何（なに）一つこわいというもののない少年（しょうねん）でした。それに生（う）まれつき弓（ゆみ）を射（い）ることがたいそう上手（じょうず）で、それこそ八幡太郎（はちまんたろう）の生（う）まれかわりだといわれるほどでした。それどころか、八幡太郎（はちまんたろう）は弓（ゆみ）の名人（めいじん）でしたけれど、人並（ひとな）みとちがった強（つよ）い弓（ゆみ）を引（ひ）くということはなかったのですが、為朝（ためとも）は背（せい）の高（たか）さが七尺（しゃく）もあって、力（ちから）の強（つよ）い上に、腕（うで）が人並（ひとな）みより長（なが）く、とりわけ左（ひだり）の手が右（みぎ）の手より四寸（すん）も長（なが）かったものですから、並（な）みの二倍（ばい）もある強（つよ）

い弓に、二倍もある長い矢をつがえては引いたのです。ですから為朝の射る矢は、並みの人の矢がやっと一町か二町走るところを五町も六町の先まで飛んで行き、ただ一矢で敵の三人や四人手負わせないことはないくらいでした。

こんなふうですから、子供の時から強くって、けんかをしても、ほかの兄弟たちはみんな負かされてしまいました。兄弟たちは為朝が半分はこわいし、半分はにくらしがって、何かにつけてはおとうさんの為義の所へ行っては、八郎がいけない、いけないというものですから、為義もうるさがって、度々為朝をし

かりました。いくらしかられても為朝は平気で、あいかわらず、いたずらばかりするものですから、為義も困りきって、ある時、

「お前のような乱暴者を都へ置くと、今にどんなことをしでかすかわからない。今日からどこへでも好きな所へ行ってしまえ。」

といって、うちから追い出してしまいました。その時為朝はやっと十三になったばかりでした。

うちから追い出されても、為朝はいっこう困った顔もしないで、

「いじのわるいにいさんたちや、小言ばかりいうおと

うさんなんか、そばにいない方がいい。ああ、これでのうのうした。」

と心の中で思って、家来もつれずたった一人、どこというあてもなく運だめしに出かけました。

二

国々を方々めぐりあるいて、為朝はとうとう九州に渡りました。その時分九州のうちには、たくさんの大名があって、めいめい国を分け取りにしていました。そしてそのてんでんの国にいかめしいお城をか

まえて、少しでも領分をひろめようというので、お隣同士始終戦争ばかりしあっていました。

為朝は九州に下ると、さっそく肥後の国に根城を定め、阿蘇忠国という大名を家来にして、自分勝手に九州の総追捕使という役になって、九州の大名を残らず打ち従えようとしました。九州の総追捕使というのは、九州の総督という意味なのです。すると外の大名たちは、これも半分はこわいし、半分はいまいましがって、

「為朝は総追捕使だなんぞといって、いばっているが、いったいだれからゆるされたのだ。生意気な小僧じゃ

ないか。」

といいいい、てんでんのお城に立てこもって、為朝が攻めて来たら、あべこべにたたき伏せてやろうと待ちかまえていました。

為朝は聞くと笑って、

「はッは。たかが九州の小大名のくせに、ばかなやつらだ。いったいおれを何だと思っているのだろう。子供だって、りっぱな源氏の本家の八男じゃないか。」

こういって、すぐ阿蘇忠国を案内者にして、わずかな味方の兵を連れたなり、九州の城という城を片っぱしからめぐり歩いて、十三の年の春から十五の年の

秋まで、大戦だけでも二十何度、その外小さな戦は数のしれないほどやって、攻め落とした城の数だけでも何十箇所というくらいでした。それで三年めの末にはとうとう九州残らず打ち従えて、こんどこそほんとうに総追捕使になってしまいました。

すると為朝に打ち従えられた大名たちは、うわべは降参した体に見せかけながら、腹の中ではくやしくってくやしくってなりませんでした。そこでそっと都に使いを立てて、為朝が九州に来てさんざん乱暴を働いたこと、天子さまのお許しも受けないで、自分勝手に九州の総追捕使になったことなどをくわ

しく手紙に書き、その上に為朝の悪口を有ること無いことたくさんにならべて、どうか一日も早く為朝をつかまえて、九州の人民の難儀をお救い下さいと申し上げました。

天子さまはたいそうお驚きになって、さっそく役人をやって為朝をお呼び返しになりました。けれども為朝は、

「きっとこれはだれかが天子さまに讒言したにちがいない。天子さまには、間違いだからといって、よく申し上げてくれ。」

といって、役人を追い返してしまいました。

為朝がいうことをきかないので、天子さまはお怒りになって、子供の悪いのは親のせいだからというので、おとうさんの為義を免職して、隠居させておしまいになりました。

為朝は、おとうさんが自分の代わりに罰を受けたということを聞きますと、はじめてびっくりしました。

「おれは天子さまのお罰をうけることをこわがって、都へ行かないのではない。それを自分が行かないために、年を取られたおとうさんがおとがめをうけるというのはお気の毒なことだ。そういうわけなら一日も早く都に上って、おとうさんの代わりにどんなおし

おきでも受けることにしよう。」
　こういって為朝はさっそく今の楽しい身分をぽんと棄てて、前に下って来た時と同様、家来も連れずたった一人でひょっこり都へ帰って行こうとしました。ところが長い間為朝になついて、影身にそうように片時もそばをはなれない二十八騎の武士が、どうしてもお供について行きたいといってききませんので、為朝も困って、これだけはいっしょに連れて都に上ることにしました。
　こういうわけで九州から為朝について来た家来は二十八騎だけでしたが、どうしてもお供ができなけれ

ば、せめて途中までお見送りがしたいといって、いくら断っても、断っても、どこまでも、どこまでも、ぞろぞろついてくる家来たちの数はそれはそれはおびただしいものでした。為朝は力が強いばかりでなく、おとうさんに孝心ぶかいと同様、だれに向かっても情けぶかい、心のやさしい人でしたから、三年いるうちにこんなに大勢の人から慕われて、ほんとうに九州の王さま同様だったのです。それでだれいうとなく、為朝のことを鎮西八郎と呼ぶようになりました。鎮西というのは西の国ということで、九州の異名でございます。

三

さて為朝は一日も早くおとうさんを窮屈なおしこめから出してあげたいと思って、急いで都に上りました。ところが上ってみておどろいたことには、都の中はざわざわ物騒がしくって、今に戦争がはじまるのだといって、人民たちはみんなうろたえて右に左に逃げ廻っていました。どうしたのだろうと思って聞くと、なんでも今の天子さまの後白河天皇さまと、とうにお位をおすべりになって新院とおよばれになっ

た先（さき）の天子（てんし）さまの崇徳院（すとくいん）さまとの間（あいだ）に行きちがいができて、敵味方（てきみかた）に別（わか）れて戦争（せんそう）をなさろうというのでした。朝廷（ちょうてい）が二派（ふたは）に分（わ）かれたものですから、自然（しぜん）おそばの武士（ぶし）たちの仲間（なかま）も二派（ふたは）に分（わ）かれました。そして、後白河天皇（ごしらかわてんのう）の方（ほう）へは源義朝（みなもとのよしとも）だの平清盛（たいらのきよもり）だの、源三位頼政（げんざんみのよりまさ）だのという、そのころ一ばん名高（なだか）い大将（たいしょう）たちが残（のこ）らずお味方（みかた）に上（あ）がりましたから、新院（しんいん）の方（ほう）でも負（ま）けずに強（つよ）い大将（たいしょう）たちをお集（あつ）めになるつもりで、まずおとがめをうけて押（お）しこめられている六条判官為義（ろくじょうほうがんためよし）の罪（つみ）をゆるして、味方（みかた）の大将軍（たいしょうぐん）になさいました。為義（ためよし）はもう七十の上を出た年寄（としよ）り[＃「年寄（としよ）

り」は底本では「年寄り」」のことでもあり、天子さま同士のお争いでは、どちらのお身方をしてもぐあいが悪いと思って、

「わたくしはこのまま引き籠っていとうございます。」

といって、はじめはお断りを申し上げたのですが、どうしてもお聞き入れにならないので、しかたなしに長男の義朝をのけた外の子供たちを残らず連れて、新院の御所に上がることになりました。

そういうさわぎの中に為朝がひょっこり帰って来たのです。為義ももう昔のように為朝をしかっているひまはありません。大よろこびで、さっそく為朝を

味方に加えて、みんなすぐと出陣の用意にとりかかりました。

四

為朝はやがて二十八騎の家来をつれて新院の御所に上がりました。新院は味方の勢が少ないので心配しておいでになるところでしたから、為朝が来たとお聞きになりますと、たいそうおよろこびになって、さっそくおそばに呼んで、

「いくさの駆け引きはどうしたものだろう。」

とおたずねになりました。すると為朝（ためとも）はおそれ気（げ）もなく、はっきりと力（ちから）のこもった口調（くちょう）で、

「わたくしは久（ひさ）しく九州（きゅうしゅう）に居（お）りまして、何（なん）十度（ど）となくいくさをいたしましたが、こちらから寄（よ）せて敵（てき）を攻（せ）めますにも、敵（てき）を引（ひ）きうけて戦（たたか）いますにも、夜討（ようち）にまさるものはございません。今夜（こんや）これからすぐ敵（てき）の本営（ほんえい）の高松殿（たかまつどの）におしよせて、三方（ぼう）から火をつけて焼（や）き立（た）てた上、向（む）かってくる敵（てき）を一方（ぽう）に引（ひ）き受（う）けてはげしく攻（せ）め立（た）てることにいたしましょう。そうすると、火に追（お）われて逃（に）げてくるものは矢（や）で射（い）とります。矢（や）をおそれて逃（に）げて行（い）くものは火に焼（や）き立（た）てられて命（いのち）を失（うしな）

います。いずれにしても敵は袋の中のねずみ同様手も足も出せるものではございません。それにあちらへお味方に上がった武士の中で、いくらか手ごわいのはわたくしの兄義朝一人でございますが、これとてもわたくしが矢先にかけて打ち倒してしまいます。まして清盛などが人なみにひょろひょろ矢の一つ二つ射かけましたところで、ついこの鎧の袖ではね返してしまうまででございます。まあ、わたくしの考えでは、夜の明けるまでもございません。まだくらいうちに勝負はついてしまいましょう。御安心下さいまし。」

といいました。

為朝がこうりっぱに言いきりますと、新院はじめおそばの人たちは、「なるほど。」と思って、よけい為朝をたのもしく思いました。するとその中で一人左大臣の頼長があざ笑って、

「ばかなことをいえ。夜討ちなどということは、お前などの仲間の二十騎か三十騎でやるけんか同様の小ぜりあいならば知らぬこと、恐れ多くも天皇と上皇のお争いから、源氏と平家が敵味方に分かれて力くらべをしようという大いくさだ。そんな卑怯な駆け引きはできぬ。やはり夜の明けるのを待って、堂々と勝負を争う外はない。」

といって、せっかくの為朝（ためとも）のはかりごとをとり上（あ）げようともしませんでした。

為朝（ためとも）は、おもしろく思（おも）いませんでしたけれど、むりに争（あらそ）ってもむだだと思（おも）いましたから、そのままおじぎをして退（しりぞ）きました。そして心（こころ）の中では、

「何（なに）もしらない公卿（くげ）のくせによけいな差（さ）し出口（でぐち）をするはいいが、今（いま）にあべこべに敵（てき）から夜討（ようち）をしかけられて、その時（とき）にあわててもどうにもなるまい。こんなふうでは、この戦（いくさ）にはとても勝（か）てる見込（みこ）みはない。まあ、働（はたら）けるだけ働（はたら）いて、あとはいさぎよく討（う）ち死（じ）にをしよう。」

と思いました。

こう覚悟をきめると、それからはもう為朝はぴったり黙り込んだまま、しずかに敵の寄せてくるのを待っていました。

すると案の定、その晩夜中近くなって、敵は義朝と清盛を大将にして、どんどん夜討ちをしかけて来ました。

頼長はまさかと思った夜討ちがはじまったものですから、今更のようにあわてて、為朝のいうことを聞かなかったことを後悔しました。そして為朝の御機嫌をとるつもりで、急に新院に願って為朝を蔵人という

重い役にとり立てようといいました。すると為朝はあざ笑って、

「敵が攻めて来たというのに、よけいなことをする手間で、なぜ早く敵を防ぐ用意をしないのです。蔵人でもなんでもかまいません。わたしはあくまで鎮西八郎です。」

とこうりっぱにいいきって、すぐ戦場に向かって行きました。

為朝が例の二十八騎をつれて西の門を守っておりますと、そこへ清盛と重盛を大将にして平家の軍勢がおしよせて来ました。

為朝はそれを見て、
「弱虫の平家め、おどかして追いはらってやれ。」
と思いまして、敵がろくろく近づいて来ないうちに、弓に矢をつがえて敵の先手に向かって射かけますと、この矢が前に立って進んで来た伊藤六の胸板をみごとに射ぬいて、つきぬけた矢が後ろにいた伊藤五の鎧の袖に立ちました。

伊藤五がおどろいて、その矢をぬいて清盛の所へもって行って見せますと、並みの二倍もある太い篦の先に大のみのようなやじりがついていました。清盛はそれを見たばかりでふるえ上がって、

「なんでもこの門を破れという仰せをうけたわけでもないのだから、そんならんぼう者のいない外の門に向かうことにしよう。」

と勝手なことをいいながら、どんどん逃げ出して行きました。

するとこんどはにいさんの義朝が平家の代わりに向かって来ました。にいさんはにいさんだけの威光で、いきなりしかりつけて為朝を恐れ入らしてやろうと思ったと見えて、義朝は為朝の顔の見えるところまで来ますと、大きな声で、

「そこにいるのは八郎だな。にいさんに向かって弓を

ひくやつがあるか。はやく弓矢を投げ出して降参しないか。」

といいました。

すると為朝は笑って、

「にいさんに弓をひくのがわるければ、おとうさんに向かって弓をひくあなたはもっとわるいでしょう。」

とやり込めました。

これで義朝もへいこうして、だまってしまいました。

そしてくやしまぎれに、はげしく味方にさしずをして、めちゃめちゃに矢を射かけさせました。

為朝はこの様子をこちらから見て、大将の義朝を

さえ射落(いお)とせば、一度(ど)に勝負(しょうぶ)がついてしまうのだと考(かんが)えました。そこで弓(ゆみ)に矢(や)をつがえて、義朝(よしとも)の方(ほう)にねらいをつけました。

「あの仰(あお)むけている首筋(くびすじ)を射(い)てやろうか。だいぶ厚(あつ)い鎧(よろい)を着(き)ているが、あの上から胸板(むないた)を射(い)とおすぐらいさしてむずかしくもなさそうだ。」

こう為朝(ためとも)は思(おも)いながら、すぐ矢(や)を放(はな)そうとしましたが、ふと、

「いや待(ま)て。いくら敵(てき)でもにいさんはにいさんだ。それにこうして父子(おやこ)わかれわかれになっていても、おとうさんとにいさんの間(あいだ)に内(ない)しょの約束(やくそく)があって、ど

ちらが負けてもお互いに助け合うことになっているのかもしれない。」
と思い返して、わざとねらいをはずして、義朝の兜に射あてました。すると矢は兜の星を射けずって、その後ろの門の七八寸もあろうという扉をぷすりと射ぬきました。これだけで義朝は胆を冷して、これも外の門へ逃げ出して行きました。

こうして為朝一人に射すくめられて、その守っている門にはだれも近づきませんでしたが、なんといっても向こうは人数が多い上に、こちらの油断につけ込んで夜討ちをしかけて来たのですから、はじめから元気

がちがいます。とうとう外の門が一つ一つ片はしからうち破られ、やがてどっと総くずれになりました。

こうなると為朝一人いかに力んでもどうもなりません。例の二十八騎もちりぢりになってしまったので、ただ一人近江の方へ落ちて行きました。

その後、新院はおとらわれになって、讃岐の国に流され、頼長は逃げて行く途中だれが射たともしれない矢に射られて死にました。

おとうさんの為義はじめ兄弟たちは残らずつかまって、首をきられてしまいました。

その中で為朝は一人、いつまでもつかまらずに、

近江の田舎にかくれていましたが、戦の時にうけたひじの矢きずがはれて、ひどく痛み出したものですから、ある時近所の温泉に入って矢きずのりょうじをしていました。するとかねてから為朝のゆくえをさがしていた平家の討っ手が向かって、為朝の油断をねらって、大勢一度におそいかかってつかまえてしまいました。

為朝はそれから京都へ引かれて、首をきられるはずでしたが、天子さまは為朝の武勇をお聞きになって、

「そういう勇士をむざむざと殺すのはもったいない。なんとかして助けてやったらどうか。」

とおっしゃいました。そこで為朝の死罪を許して、その代り強い弓の引けないように、ひじの筋を抜いて伊豆の大島に流しました。

為朝は筋を抜かれて弓は少し弱くなりましたが、ひじがのびたので、前よりもかえって長い矢を射ることができるようになりました。

五

為朝は大島へ渡ると、

「おれは八幡太郎の孫だ。この島は天子さまから頂

いたものだ。」

といって、島を討ち従えてしまいました。そのうち方々にかくれていた為朝の家来が、一人二人とだんだん集まって来て為朝につきました。

「九州よりはずっと小さいが、また為朝の国ができた。」

こういって、為朝はここでも王さまのような威勢になりました。

ある時為朝は海ばたに出て、はるか沖の方をながめていますと、白いさぎと青いさぎが二羽つれ立って海の上を飛んで行きます。為朝はそれをながめて、

「わしかなんぞなら知らないが、さぎのような羽の弱いものでは、せいぜい一里か二里ぐらいしか飛ぶ力はないはずだ。それがああして行くところを見ると、きっとここからそう遠くないところに島があるにちがいない。」

といって、そのまま小船にとび乗って、さぎの飛んで行った方角に向かってどこまでもこいで行きました。

その日一日こいで、海の上で日がくれましたが、島らしいものは見つかりません。夜はちょうど月のいいのを幸いに、またどこまでもこいで行きますと、明け方になって、やっと島らしいものの形が見えました。

為朝はだんだんそばへよってみますと、岸は岩がけわしい上に波が高いので、船が着けられません。さんざん回りをこぎ回りますと、やっと平らな州のようなところがあって、島の中から小さな川がそこに流れ出していました。

為朝はそこから上がって、ずんずん奥へ入って見ますと、一めん、岩でたたんだような土地で、田もなければ畠もありません。ところどころに見なれない草木が生えて、珍しい匂いの花が咲いていました。

いくら歩いても家らしいものも見えませんでしたが、そのうちいつどこから出て来たか、一丈も背の高さ

のある大男がのそのそと出て来ました。まっくろな体に毛がもじゃもじゃ生えて、頭の髪の毛はまっ赤で、針を植えたようでした。

為朝は不思議に思って、

「この島は何という島だ。」

と大男の一人に聞きますと、

「鬼ガ島といいます。」

とこたえました。

為朝は、いよいよ珍しく思って、

「じゃあお前たちは鬼か。それとも先祖が鬼だったのか。」

とたずねました。

「そうです。わたくしどもは鬼(おに)の子孫(しそん)です。」

「鬼(おに)ガ島(しま)なら、宝(たから)があるだろう。」

「むかしほんとうの鬼(おに)だった時分(じぶん)には、かくれみのだの、かくれがさだの、水の上を浮(う)く靴(くつ)だのというものがあったのですが、今(いま)では半分人間(はんぶんにんげん)になってしまって、そういう宝(たから)もいつの間(ま)にかなくなってしまいました。」

「よその島(しま)へ渡(わた)ったことはないか。」

「むかしは船(ふね)がなくっても、ずんずん、よその島(しま)へ行って、人をとったりしたこともありましたが、今(いま)では船(ふね)

もないし、たまによそから風にふきつけられてくる船があっても、波が荒いので、岸に上がろうとすると岩にぶつかって砕けてしまうのです。」
「何を食べて生きている。」
「魚と鳥を食べます。魚はひとりでに磯に上がって来ます。穴を掘ってその中にかくれて、鳥の声をまねていると、鳥はだまされて穴の中にとび込んで来ます。それをとって食べるのです。」
こういっている時に、ひよどりのような鳥がたくさん空の上をかけって来ました。為朝はもって来た弓に矢をつがえて、鳥に向かって射かけますと、すぐ五六

羽ばたばたと重なり合って落ちて来ました。

島の大男は弓矢を見たのは初めてなので、目をまるくして見ていましたが、空を飛んでいるものが、射落とされたのを見て、舌をまいておじおそれました。そして為朝を神さまのように敬いました。

為朝は鬼ガ島を平らげたついでに、ずんずん船をこぎすすめて、やがて伊豆の島々を残らず自分の領分にしてしまいました。そして鬼ガ島から大男を一人つれて、大島へ帰って来ました。

大島の者は、為朝が小船に乗って出たなり未だに帰って来ないので、どうしたのかと思っていますと、

ある日(ひ)恐(おそ)ろしい鬼(おに)をつれてひょっこり帰(かえ)って来(き)たので、みんなびっくりしてしまいました。

六

こうして為朝(ためとも)は十年(ねん)たたないうちに、たくさんの島(しま)を討(う)ち従(したが)えて、海(うみ)の王(おう)さまのような勢(いきお)いになりました。すると為朝(ためとも)のために大島(おおしま)を追(お)われた役人(やくにん)がくやしがって、ある時(とき)都(みやこ)に上(のぼ)り、為朝(ためとも)が伊豆(いず)の七島(とう)を勝手(かって)に奪(うば)った上に、鬼(おに)ガ島(しま)から鬼(おに)をつれて来(き)て、らんぼうを働(はたら)かせている、捨(す)てて置(お)くと、今(いま)にまた謀反(むほん)の戦(いくさ)を

おこすかもしれませんといって訴えました。

天子さまはたいそうおおどろきになり、伊豆の国司の狩野介茂光というものにたくさんの兵をつけて、二十余艘の船で大島をお攻めさせになりました。

為朝は岸の上からはるかに敵の船の帆かげを見ると、あざ笑いながら、

「久しぶりで腕だめしをするか。」

といって、例の強い弓に長い矢をつがえて、まっ先に進んだ大きな船の胴腹をめがけて矢を射込みました。すると船はみごとに大穴があいて、たくさんの兵を乗せたまま、ぶくぶくと海の中に沈んでしまいました。

敵はあわてて海の中でしどろもどろに乱れて騒ぎはじめました。

為朝はつづいて二の矢をつがえようとしましたが、船を沈められた大ぜいの敵兵が、おぼれまいとして水の中であっぷ、あっぷもがいている様子を見ると、ふとかわいそうになって、

「かれらはいいつけられて為朝を討ちに来たというだけで、もとよりおれにはあだも恨みもない者どもだ。そんなものの命をこの上むだにとるには忍びない。それにいったんこうして敵を退けたところで、朝敵になっていつまでも手向かいがしつづけられるもので

はない。考えて見ると、おれもいろいろおもしろいことをして来たから、もう死んでも惜しくはない。おれがここで一人死んでやれば、大ぜいの命が助かるわけだ。」

こういって、為朝はそのままうちにかえって、自分の居間にはいると、しずかに切腹して死んでしまいました。

そのあとで寄せ手は、こわごわ島に上がって見て、為朝が一人でりっぱに死んでいるのを見てまたびっくりしました。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年６月10日第1刷発行
※「鬼ガ島」の「ガ」は底本では小書きになっています。
入力：鈴木厚司
校正：今井忠夫
２００４年１月６日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。